

# 学問的に思考する能力

## —国際バカロレアの実践から—

御手洗 明佳（早稲田大学大学院）

### 1. 問題の所在

本発表は、学問的に思考するとは何を意味しているのか、国際バカロレア（以下、IB とする）の授業実践を通して明らかにする。

学問（science）とは、一定の理論に基づいて体系化された知識と方法（広辞苑第6版）、と記されている。この定訳に従うならば、これまで小中高の教育現場では学問の知識や方法を習う場所であって、どのように思考すればよいか考える場所ではなかった。1989年の改訂以降、新学力観（思考力・判断力・表現力）が示されるようになったものの、中等教育の最終試験ともいえるセンター入試問題では、未だ一つの解へたどり着く結果のみを問われており、解にたどり着いた思考力の是非を問われることはない。一方のIBディプロマプログラムの最終試験では、解が一つに限られておらず、結果よりもその経過を重視していることがその特徴といえる。本発表では、「総合学習を柱の中心」（浅野, 1998:3）におき、「人間形成のプログラムというよりも学問的思考の訓練プログラム」（西村, 1998:15）といわれるIBの教育プログラムに焦点をあて、「学問的に思考する」とは何か、IBの教育実践から明らかにしていくものとする。

### 2. 調査概要

#### 2-1. 対象校・対象者

本発表で扱う対象校は、日・英・仏における

IB実施校4校である。日本2校、英国1校、フランス1校であり、日本のIB校は、第1条校の私立学校、英国、フランスはインターナショナルスクールである。対象者は、IBディプロマ言語A1（母語の授業）をおこなっている11年生および12年生の生徒とそれを教える教員である。

#### 2-2. 調査方法

分析に扱ったものは、主に（1）授業参観で録音したデータである。その他には、2）授業中に配布されたプリント、3）授業シラバス、4）テスト問題、5）ヒアリングデータ、も使用した。調査実施期間は、2008年から2012年である。IBディプロマは6教科とその教科間を繋ぐ3要件で教育プログラムが構成されている。本発表では、生徒の母語に当たる言語A1の授業を分析対象としている。

### 4. 調査結果

ディプロマ言語A1の授業実践で扱う作品は、世界文学、精読、物語・小説・自由選択（日本の学校では古文をおこなう）である。以下、授業でおこなわれた実践である。

#### a) 文学的分析

文章の分析的な読みと構造の理解をするため、必ず一冊の文章、または詩が課題に出される。これは、言語A1の狙いが多様な形式と文脈に慣れ、さらに獲得することであるからといえる。文学作品等を用いて一連の物事には「構

造」があることを理解させている。

#### b) 批判的思考と独創性

表現する力の向上を目指しているため、作文、口答試験では論理性と説得力の有無が問われる。文章の分析や、調べ学習からエビデンスを探し出す作業をおこなう。

#### c) 関連する参考文献の使用

表現する力の向上を目指しているため、作文、口答試験では論理性と説得力の有無が問われる。文章の分析や、調べ学習からエビデンスを探し出す作業をおこなう。

テスト問題では、「比較」の問題が多く出題される。共通点と差異点を見つけだし、自分の論理を補完する手段として扱う。

#### d) 論証し評価する能力

論文を書く、ディベートをする、口答発表する等、「(他者へ) 伝える」ことを狙いと位置づける IB にとって、これを評価する方法も評価対象に含まれる。一定の理論に沿っているかを評価するのであるが、それを可能にしているのは、教育プログラムの3要件の中の一つである「知識の理論」といえる。

### 4. 考察

IB ディプロマ言語 A1 が繰り返す一連の作業にはどのような意図が隠されているのだろうか。その背景には、IB プログラムの学問体系の中心に「知識の理論」が据えられていることに起因している。

宮腰によれば、「知識の理論」はフランスのリセで教えられている哲学をもとに、6科目で習得した知識を体系的に再構成することを狙いとしているという。リセで教えられる哲学の目的は、既成の価値観にとらわれず、自由で

自主的に物事を考え判断できる能力を身につけさせ、またその自主的な判断をできるだけ正確な言葉を用いて論理的にきちんと表現する力をつけさせようとしている点にある(白井, 2006)。この目的は、IB 教育の根幹を貫いており、母語を学習することを日本の「国語」を学習することと同等に捉えてしまうことに大きな誤りが生じてしまう所以といえる。

### 6. 結語

本発表では、IB ディプロマ言語 A1 の授業実践でおこなわれた実践を示し、また、言語 A1 のみならず IB プログラムの根底にはフランスリセで実施される哲学教育の系譜が脈々と引き継がれていることを明らかにした。総合学習を柱とし、調べ学習・体験学習・創造性ある学習といった教育体験を「学術的に支える」ものは、昔から引き継がれてきた哲学的思考法であった。「能力観」の養成は世界の先進諸国の教育現場において大きな関心ごとである(松下, 2010)。IB の教育実践は、この能力形成にとって明確な理論の形成の方法を教授することが重要であり、その道筋として哲学を中心にする一つの重要な事例であるといえる。

### 参考文献

- 白井成雄 (2006) 「フランスの高校 (リセ) の哲学教育について」『哲学会誌』(41) 33-37
- 松下佳代編 (2010) 『〈新しい能力〉は教育を変えるか——学力・リテラシー・コンピテンシー——』ミネルヴァ書房
- 宮腰英一編 (1994) 「国際的カリキュラムの開発と普及拡大—国際バカロレア (IB) のジレンマー」『教育行政学会年報』(20) 245-257